

今週の為替相場見通し(2024年6月3日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		156.36 ~ 157.71	157.25	155.00 ~ 159.00
ユーロ	(ドル)		1.0789 ~ 1.0889	1.0847	1.0750 ~ 1.0950
(1ユーロ=)	(円)		169.08 ~ 170.79	170.62	169.00 ~ 171.50
英ポンド	(ドル)		1.2681 ~ 1.2801	1.2743	1.2600 ~ 1.2800
(1英ポンド=)	(円)	*	198.76 ~ 200.74	200.45	198.00 ~ 202.00
豪ドル	(ドル)		0.6591 ~ 0.6679	0.6653	0.6500 ~ 0.6780
(1豪ドル=)	(円)	*	103.36 ~ 104.87	104.66	103.00 ~ 106.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第一チーム 尾身 友花

(1)今週の予想レンジ: 155.00 ~ 159.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は約1か月ぶりの高値圏まで上昇した後、水準を切り下げた。週初27日、156.84円でオープンしたドル/円は、内田日銀副総裁の発言がタカ派的と解釈され、円金利上昇とともに156円台後半でじり安推移。海外時間は米国休日により市場参加者が少ない中、156円台後半でのみ合い推移となった。28日、ドル/円は前日の流れを引き継ぎ、156円台後半でレンジ推移。海外時間は、米金利低下と共に156円台半ばまで軟化も、その後米5月コンファレンスボード消費者信頼感の良好な結果を受けて米金利が反発。それにつれる格好で、157円台に乗せた。29日、ドル/円は安達日銀審議委員による発言が想定ほどハト派的では無かったことを受け円金利が上昇し一時157円を割り込むも、米金利の上昇地合いが続く中で直ぐに反発し、157円台を回復した。海外時間は、米金利の一段高に合わせ、約1か月ぶりの高値水準である157.71円まで上伸した。30日、ドル/円は日本株の軟調推移が嫌気され、リスク回避の動きから157円を割り込んだ。海外時間は、米1~3月期GDP(改定値)の冴えない結果に米金利が低下し、一時週安値となる156.36円まで続落した。31日のドル/円は、ドル売りの一服を受け、156円台後半で取引が中心となった。しかし終盤は157円台前半まで上昇し、同水準にてクローズした。

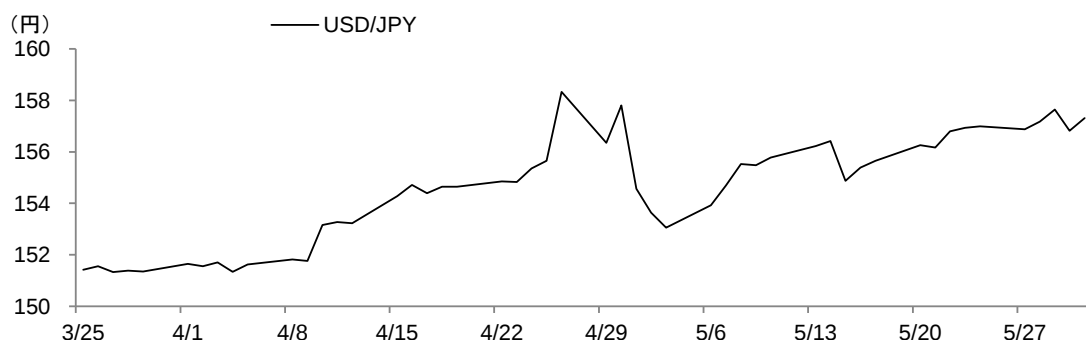
今週のドル/円は高値圏でのレンジ推移を予想する。具体的には155円~159円水準で取引されるのではないかと。レンジ推移の背景としては、米国の利下げ開始予想時期が後ずれしており、ドル高が継続しそうなことを挙げたい。また、先週見られたFRB高官の発言は、利下げを先送りするような内容が主だった。この為、米利下げ開始を視野に入れたドル/円の反転下落はまだまだ先になりそう。一方、先週、内田日銀副総裁は講演で「デフレとゼロ金利との闘いの終焉が視野に入った」と述べるなど、今後の日銀の金融政策転換を想起させるような発言等も見られており、一方的なドル高・円安にも歯止めがかかりそうだ。

今週は、3日(月)米5月ISM製造業景気指数、5日(水)米5月ADP雇用統計、米5月ISM非製造業景気指数、7日(金)米5月雇用統計の発表が予定されており、経済指標の発表が多いため、結果に一喜一憂する場面も見られそうだ。

(3)先週までの相場の推移

先週(5/27~5/31)の値動き:

安値 156.36 円 高値 157.71 円 終値 157.25 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 松永 裕司

(1) 今週の予想レンジ: 1.0750 ~ 1.0950 169.00 ~ 171.50 円

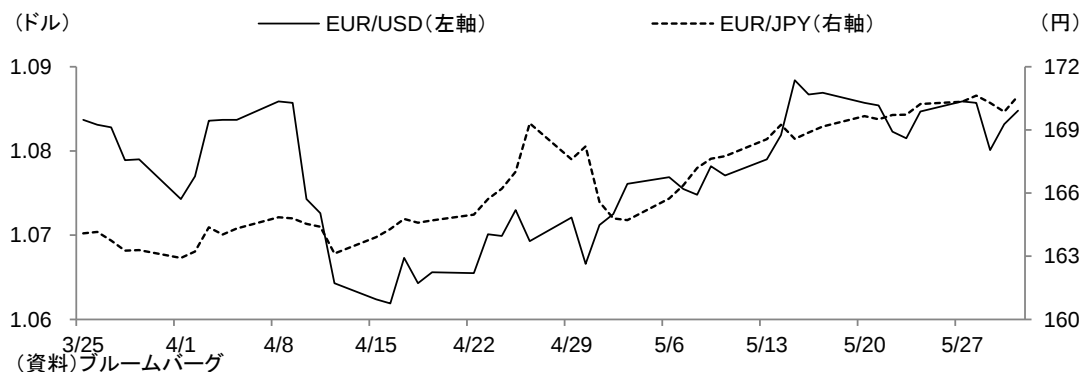
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは1.08台を中心に上下しながらも、方向感に欠ける展開となった。週初27日、1.0847でオープンしたユーロドルは、ECB当局者のハト派発言に弱含む場面も見られたが、米国休日で薄商いの中、大きな方向感はず終日を通し1.08台半ばで推移した。28日、米金利低下が支援材料となり一時週高値となる1.0889まで続伸も、その後、ECB高官の年内複数回利下げを支持する発言や米経済指標の強い結果、不調な米債入札結果を受けた米金利の上昇を受け1.08台半ばに反落した。29日、独5月消費者物価指数(CPI、速報)の強めの結果が材料視され小幅に上昇するも、その後は米経済指標の予想を上回る内容や低調な米7年債入札の結果を受けた米金利の上昇が重しとなり、上値重く推移した。30日、グローバルな株価の軟調推移が嫌気され、一時週安値の1.0789まで続落したものの、欧州時間に入り株価が持ち直したことや、米金利低下が支援材料となり1.08台前半に反発した。31日、ユーロ圏5月消費者物価指数(HICP、速報)の市場予想を上回る結果もサポートに、1.08台後半まで上昇。しかしその後は売り戻しに押され、1.08台半ばまで戻して越週した。

今週のユーロ/ドルは、底堅い動きを予想。欧州では6日(木)にECB政策理事会が開催予定。直近のECB高官の発言を踏まえれば、今回の会合での▲0.25%の利下げが確実視されており、市場の注目は以降の利下げ時期や今後の利下げスピード。ラガルドECB総裁の発言や、同時に公表されるスタッフによる経済、物価見通しの内容に注目したい。足元のECB高官の発言を見ると比較的タカ派とされるメンバーからも年内複数回の利下げを支持する発言が聞かれるが、一方で先月公表された欧州の賃金、インフレ統計は引き続き根強いインフレを警戒させる内容であり、利下げを急ぐ可能性は低い。経済指標の結果を見ながら毎会合で判断していく方針を示すと思われ、相場への影響も限られよう。その他7日(金)米5月雇用統計など米国では重要経済指標の公表も相次ぐ。結果を受けた相場の乱高下には警戒したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(5/27~5/31)の値動き: (対ドル) 安値 1.0789 高値 1.0889 終値 1.0847
(対円) 安値 169.08 高値 170.79 終値 170.62



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 将行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2600 ~ 1.2800 198.00 ~ 202.00 円

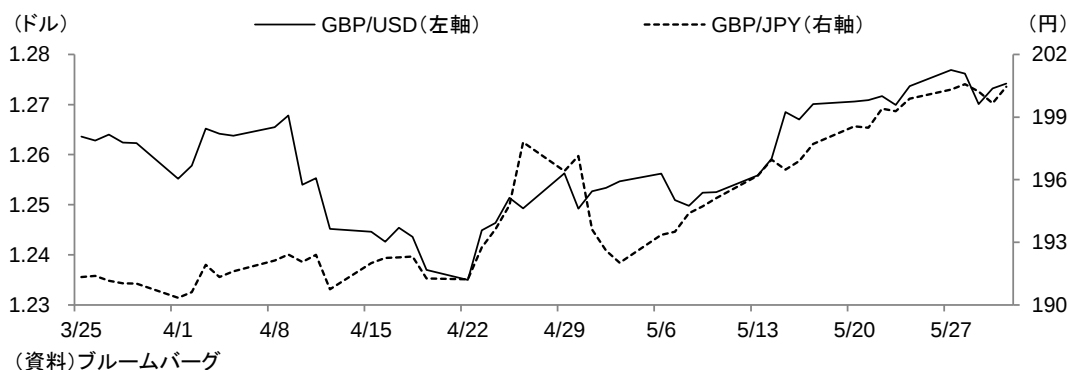
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は個別の材料に乏しい中で、米金利動向に左右されるかたちで一進一退の動き。27日から28日にかけては、約2か月ぶりの高値水準となる1.2801まで約+0.5%上昇。その後は米金利の上昇に押される形で30日までには一転して1.2681まで下落。その後、米金利の低下に合わせて週初の水準である1.274付近まで持ち直している。市場の反応は限定的だったものの、7月4日の総選挙に向けて保守党・労働党双方から政策のメッセージが寄せられている。メディアで大きく取り上げられたのは、保守党・スナク政権が打ち出した「徴兵制復活」の方針である。保守党の強硬派をターゲットとしたものと見られるこの政策が、実際にどれだけ支持率の上昇に結び付くのかは定かではないが、メディアの注目を集めるという点に関しては成功していると言えるだろう。政策を矢継ぎ早に打ち出すことで、「政策を出さない労働党」との違いをアピールすることが目的のようにも思われる。一方の労働党は、「影の財務相」レイチェル・リーブス氏が5月26日のBBCによるインタビューで、労働党政権で所得税増税や国民保険料の値上げは行わないと明言している。もっとも、NHS改革や、移民管理など、国民が労働党に改善を期待している政策は、いずれも資金が必要となる可能性がある。増税などを行わずに、どこに財源を求めるのか、という問題は残る。

今週の英ポンド相場は、個別の材料には乏しく、対ドルでは7日(金)公表の米5月雇用統計次第となりそう。もっとも、6日(木)に発表される英企業調査(ディビジョンメーカーパネル)でのインフレ期待の項目に対する調査結果は確認しておきたい。一方、英国でのインフレ圧力の継続とBOEの高金利政策の長期化の可能性の高まりを反映する形で、ポンドは円やユーロなど他の主要通貨と比較して堅調な展開が続くだろう。4月消費者物価指数(CPI)の上振れや総選挙の発表もあり、BOEの利下げ開始時期の織り込みは大幅に後退し、ポンドは対円では2008年8月以来となる200円の水準に到達している。5月末時点で、短期金利市場では9月の利下げ開始が7割弱の確率で織り込まれている格好だ。6日(木)のECBの会合で利下げ開始が見込まれているユーロに対してもポンドは堅調となりやすいだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/27~5/31)の値動き: (対ドル) 安値 1.2681 高値 1.2801 終値 1.2743
(対円) 安値 198.76 高値 200.74 終値 200.45



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.6500 ~ 0.6780 103.00 ~ 106.00 円

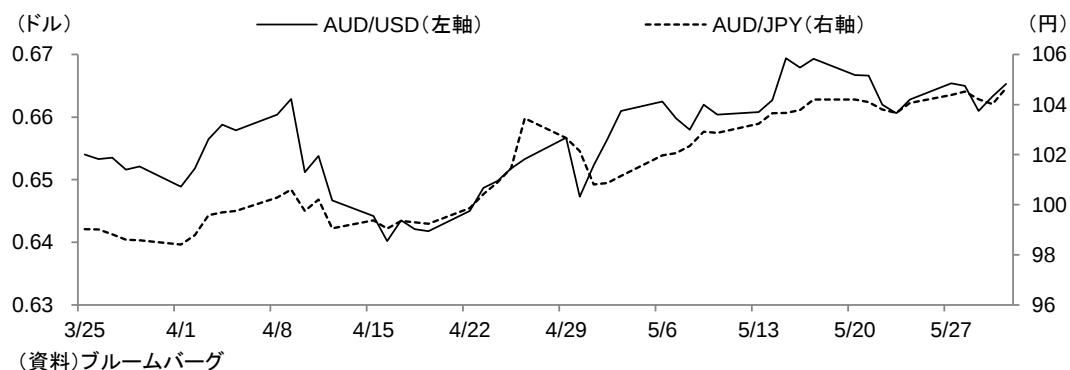
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、米金利上昇で一時0.66を割るも、概ね0.66台でレンジ推移した。月曜は0.66台前半で取引開始後、米国祝日で動意薄く、0.6650付近で引け。火曜は終始ナローレンジで推移。豪4月小売売上高は前月比+0.1%と、前回の同▲0.4%から回復も、事前予想を下回り、低調な伸びに留まった。但しこの結果を受けた豪ドルの反応は限定的であった。水曜は豪4月消費者物価指数(CPI)は前年比+3.6%と前回値・予想値を上回り、5か月ぶりの水準となったことで、豪ドルは0.66半ばから0.6670付近まで上昇するも、フロー一巡後は反落。NY時間に米金利が上昇幅を拡大する中、豪ドルは下値を追う展開となり、0.6610まで下落。米7年国債入札も低調な結果となったことも米国債利回りの上昇要因となった。木曜は前日の流れを引き継ぎ、売りが優勢となり一時0.6591まで値を下げるも、その後反転。米1~3月期GDP(改定値)が下方修正されたことを受け米ドル売りが進行すると、豪ドルは更に上値を追い、一時0.6647まで上昇した。金曜は米4月個人消費支出(PCE)デフレーターが市場予想と一致し、年初来最低の伸びとなった事で、年後半の米国利下げを後押しする内容となり、米国債が上昇し(金利は低下)、ドル売りを背景に0.66台半ばから0.66台後半まで押し上げられた。その後堅調に推移する米国株に支えられ、豪ドルは0.6670付近まで上昇後、フローが一巡する流れに一時0.66台前半まで戻し、0.66台半ばで越月した。

今週は、3日(月)米5月ISM製造業景気指数、5日(水)ブロックRBA総裁による議会証言、豪1~3月期GDP、米5月ADP雇用統計、6日(木)豪4月貿易収支、米4月貿易収支、7日(金)米5月雇用統計が予定。先週金曜に発表された米4月PCEデフレーター(前月比)ではコアベースで伸びが僅かに鈍化し、市場の反応はゆっくりではあるが着実にインフレが低下していると評価する向きが多い。今後は利下げまでにFRBがあとどの程度のインフレ鈍化を必要としているかを、当局者の発言もしくは米FOMCの声明文などで探る事となろう。現状1回の初回利下げ織り込みは年内12月となっている。今週の米5月雇用統計では失業率は3.9%で横ばいも、前回比で雇用者数が増加するとの市場予想が出ており、また、平均時給(前月比)も僅かに上昇するとみられている。この予想通りとなれば米雇用が依然として堅調に推移している事を示唆する為、先週の物価指標で安心したのも束の間、米利下げ期待がまた後退してしまう懸念がある。反対に米5月雇用者数が予想を下回れば、引き続き米利下げ期待をサポートする為、ドル売りから豪ドルは再び0.67台へ押し上げられる可能性が出てくる。いずれにせよ、まずは結果を待ちたい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(5/27~5/31)の値動き: (対ドル) 安値 0.6591 高値 0.6679 終値 0.6653
(対円) 安値 103.36 高値 104.87 終値 104.66



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。